

祝 辞

宮城県における、新型コロナウイルスによる感染拡大は落ち着いてきたように見受けられます。このような状況のもと、宮城県仙台第二高等学校における、令和五年度、第七八回、入学式が、ここ講堂において、無事挙行されることとなりました。

栄えある今日を迎えた新入生は、男子一七七名 女子一四三名、合計三二〇名とお聞きしております。宮城県仙台第二高等学校同窓会を代表いたしまして、新入生の皆さんにお祝いを申し上げますと共に、今日を待っておられた保護者の方々に対しても衷心よりお祝い申し上げます。

桜花満開の季節、仙台二高の桜花も今まさに盛りと華麗な姿を見せておりましたが、花吹雪となって散っております。最近、ゆえあって、桜花を題材とした絵葉書の依頼を受けて、満開の桜を鉛筆と水彩絵具で原画を描きました。満開の桜花はきらびやかで豪華であり、「繁栄」を象徴しているのではないか。そのような思いで制作しました。

『古事記』では、コノハ、ナノサクヤヒメ木花之佐久夜毘売という「繁栄」と「限られた命」を象徴する女神が登場する神話があります。そうなのです。桜花は、華やかですが、脆く、はかなく、その命は短いのです。

『記紀』『万葉集』の研究者であり、「令和」という年号の発案者である中西進さんは、『古事記をよむ(2)―天降った神々と』のなかで「コノハ、ナノサクヤヒメ木花之佐久夜毘売の「コノハ木花」は何の木とも語られないが、古代人は桜をもつ

て咲くものの代表と考えていた。桜の花は、人々に落花の紛れを感じさせる。すでに桜の咲いている姿の中に、人々は散る影を感じ取る。そうした桜を見る目がこの話を支えているといえよう。」と、述べています。

花が「咲く」という言葉から生まれた唯一の花である「桜花」は、「華やかさ、美しさⅡ生（生きるエネルギー）」と「限りある、消えさるⅡ死（メント・モリ）」とを、併せ持つ花として『古事記、万葉集』の時代から現代まで、伝統的「日本の美意識」として認識されてきたのでしよう。

「桜花」といえば、わたくしにも色々と思い出があります。

小学一年生の春、青葉の山、青葉城址へ、花見で登りました。現在の仙台二高と宮城県美術館の交差点には、金網が張りめぐされたゲートがあり、アメリカ兵MPが開けて、通してくれました。

二高生となって、それまで進駐軍のプールであった付近が返還され、その南校地には、進駐軍の建物を利用しての図書館と応援団部室があり、空き地もかなり広く、四月中は、対一高定期戦のおりに設置する「出し物」を美術部が総力をあげて制作していました。二年生後半から、わたくしは応援団副団長となり、渡辺幸英団長、錦織有平副団長、館澤貢次幹事長を中心として、応援団幹部三十五名ほどが毎日、部室に集まりました。そして、澱橋を渡り、廣瀬の流れに沿う河原で、旗を振り、エールの発声練習を。そこから、またランニングして川内に戻り、桜花に彩られた亀岡八幡宮の入口から、長い古びた三三五段の石段を走り登り、対一高定期戦での必勝を祈願し、駆け足で降りるのです。今年の今頃、懐かしさのあまり、亀岡八幡宮を訪れました。染井吉野、枝垂れ桜が咲き乱れ、仙台藩四代藩主伊達綱村以来と思われる古色蒼然とした石段のたたずまいは変わっていませんでした。

また、応援団幹事長であった館澤貢次さんは、経済分野のルポライターで

したが、生涯に一冊の小説『大戦秘史リーツェンの桜―敗戦の地ドイツでチフスと闘い、散った日本人医博・肥沼信次』を著しています。肥沼信次さんは、ベルリン大学での放射線医学の研究者でした。第二次世界大戦後、最悪の環境衛生のため発疹チフスが蔓延し、そのため彼の献身的な医療活動で、多くの人々を救いましたが、しかし、彼自身もチフスにかかり亡くなってしまったのです。死の間際に「日本の桜を見せたい」「日本の桜が見たい」と言い残したそうです。後年、親族が八重桜を当地ヴリーツェン市に寄贈したとのことです。

四月一日、東北学院大学シュネーダー記念館の十六階から、大年寺山から八木山への連なりを間近に見ることができました。日本晴れであり、遠く白銀の蔵王山も見えました。そこかしこ「桜花」が咲き誇り、まさに山が笑っているようにも見えました。わたくしも、心が踊り、楽しくなり、喜びの声をあげたくなり、思わず、スマホで撮影してしまいました。現在一般に使われている竹冠の「笑」は、『古事記』などでは「咲」という万葉仮名がもっぱら使われていたそうです。

WBCの中継を見ても、逆転の場面、大きな声、喜びの声をあげ、満ち足りた気分になっている笑顔が、わたくしをも微笑ませてくれ、選手との一体感、親近感がこみあげてきたのも事実でした。

仙台二高に入学してきた新生には、等しく応援練習が課せられていると、聞いております。応援歌を覚え、大きな声で歌わなければいけないのです。応援歌練習を積み重ね、試合で応援すると、きっと満ち足りた気分が、そして仲間としての一体感が醸しだされ、そこに喜びと笑いにみちた空間に包まれます。仙台二高は、生徒のみなさんによる小さな共同体です。おたがいがそれぞれの立場を尊重し、みなさんの多様性を秘めた人格を認め合う場

なのです。人と人の会話、コミュニケーションは、微笑み合いながら、共に感じ合い、会話が積み重ねられると仲間としての信頼感が生まれ、この小さな共同体はより活性化してゆくのではないでしょうか。対一高定期戦の応援の伝統もその現れだろうと思います。わたしたち同窓生にとっても、嬉しいかぎりです。

仙台二高での、これからの三年間、「ともにともに いそしまむ いざいざ 怠らず」、勉学に、スポーツに、「文武一道」仲間と一緒に、真摯に励んでください。そのように集中すると、いつもは気づけない、心の奥深くにある本来の「自分自身、自己」の姿を発見してしまうことがあります。そのような心の声を聞くことができないと、「自分自身」の、氷山の一角に過ぎない、表面に見出される「自意識、自我」に頼ってしまいます。そうになると、短絡的に結果を求める、たとえば偏差値至上主義や、極端な拝金主義も生まれてしまうのです。

宮城県仙台第二高等学校同窓会会員一同、並びに教職員一同、皆さんの御入学を心からお祝いします。本来の真の自己探求に励み、心の奥深くにある「自分自身、自己」に限りない信頼を寄せてください。「ローカルな地域社会」と「グローバルな地球社会」の一員として取り組み、そして貢献なさり、真の人間として成長することを祈念し、祝辞といたします。

令和五年四月十日

宮城県仙台第二高等学校同窓会

会長

佐藤一郎

